



1 装束にある梅鉢や巴紋はほかの金津流では見られない特徴。力強い太鼓と勇壮な舞が観客の心を魅了する

2 演目によって役踊りの踊り手は変わる。太鼓のバチさばきを合図に円陣になったり、半円形に座ったりしながら息を合わせて舞う

3 例大祭を行う護領神社の参道につながる市道沿いには、代々の供養碑が立ち並ぶ。平成13年(右)と最古の文化5(1808)年(右から二番目)が隣り合っている。供養碑には、当時の踊り手や世話人などの名前が刻まれている

奥州遺産

— ときを越え
受け継がれるもの —

第117回

金津流鶴羽衣鹿踊

(県指定無形民俗文化財)

江刺稲瀬

江刺の西部、稲瀬鶴羽衣集落に伝わる金津流鶴羽衣鹿踊は、400年以上前から地域の発展とともに受け継がれてきた。慶長12(1607)年に宮城郡七北田の藤九郎から鶴羽衣初代の万吉に伝授されたことが歴史の始まりとされる。古くは行山流とも交流があり、踊りや装束からその様子がうかがえる。昭和38年には伝統を受け継ぎ活動していることが評価され、県指定無形民俗文化財に指定された。現在も「荒金」や「春駒」など10の演目を継承し、地域の祭りや催しで披露している。後継者育成にも力を注いでおり、稲瀬小学校の児童に教え、運動会や芸能祭で演目を披露する活動を行っている。金津流鶴羽衣鹿踊保存会には、当初児童だった踊り手も在籍しており、及川浩一代表は「鹿踊に魅力を感じ、将来一緒に活動できれば」と語った。400有余年にわたる歴史は、今も色あせることはない。演目が過去と現在を結び、先人たちの魂は踊り手と共に今も生き続けている。

広 告

● 広告の問い合わせは、(株)東広社 (☎ 0197-64-1523)